

第6回「(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議」会議録

日 時：平成21年6月28日(日)午後2時～4時

会 場：中央図書館 3階 ビーンズホール

次 第

1. 開 会

2. 八木教育次長挨拶

3. 議 事

(1) 教育フォーラム2009「子どもの読書活動を進める市民のつどい」事業報告
について

①教育フォーラム2009の記録

②アンケート結果

- ・基調講演の感想
- ・パネルディスカッションの感想
- ・子どもの読書活動を進めるために大切と感じたこと

③「にいがた 本と子どもの風景」

(2) 西蒲区学校図書館訪問を振り返る

・西蒲区学校図書館訪問記録

(3) 「子どもの読書活動を効果的に進めるには」

－間藤委員からの提言－

(4) 今後の取組みについて

4. 閉 会

・出席者

委 員： 足立委員・荒川委員・佐藤委員・正道委員・高野委員・間藤委員・宮下委員

事務局： 保育課斎藤補佐(指導保育士)・栗谷川司書(坂井輪中学校)・青野司書
(鳥屋野小学校)

中央図書館：八木教育次長・上山課長・持田補佐・山下補佐・子安係長
真島副主幹・真柄主査・三條主査・餅谷副主査

豊栄図書館：岩野館長・学校図書館支援センター長谷川副主幹(司書)

新津図書館：三田館長

白根図書館：石口館長

西川図書館：松原館長・学校図書館支援センター加藤副主幹(司書)

・傍聴者 1名

1. 開 会

(司 会)

ただいまから第6回(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を始めさせていただきます。本日は、委員全員のご出席です。傍聴者はお一人です。

開会にあたり、八木教育次長よりご挨拶をいたします。

2. 八木教育次長挨拶

(八木教育次長)

ご多忙の中、会議にご参集いただき、大変ありがとうございます。委員の皆様には、教育フォーラムにご参加いただき、大変ありがとうございました。パネリストをお願いした皆様には、事前の準備も含めご尽力いただき、感謝を申し上げます。おかげさまで、盛会裏に終わることができたと思っています。参加者の感想などを拝見しても、全体として評価いただいたと実感しており、これを読書計画づくりのはずみにしていければと考えています。

今日は第6回目の会議ということで、当初の計画よりも2回ほどオーバーしていますが、引き続き委員の皆様には、計画の策定に向けてよろしく願いいたします。簡単ではございますが、挨拶代わりにさせていただきます。

3. 議 事

(1) 教育フォーラム2009「子どもの読書活動を進める市民のつどい」事業報告について(資料1)

(荒川座長)

教育フォーラム2009「子どもの図書活動を進める市民のつどい」の事業報告を事務局からお願いしたい。

(事務局)

事前送付した教育フォーラムの「事業報告」により全体の概要を報告する。

参加者は402人で、このうち約半分の208人が一般参加者、PTA・ボランティア関係者

が40人、保育園や幼稚園の関係者が18人、小中学校の学校関係者が70人、市議会議員7人と教育委員会の教育委員6人全員を含む来賓・その他として66人が参加していた。今回のフォーラムは、一般参加者が多かったという点が、これまで開催された教育フォーラムとは違う特徴ではなかったかと思う。

アンケート結果は、ほぼ半分の180人の方から提出していただいた。性別は女性が79%、ほぼ8割という数字だった。アンケートを書いていた方が、どういう立場で参加したのかということだが、一般、ボランティア、PTAを合わせると116人で、64%になった。学校職員42人からも記入していただいた。それぞれの感想と、アンケートの一番最後にあった「子どもの読書活動を進めるために大切と感じたこと」については、お送りした別紙1から別紙3までに、そのまま転記してある。

写真集「にいがた本と子どもの風景」というものをお送りしたが、これは当日、開催前に上映したスライドだ。中央図書館における写真のほか、ワーキンググループとして事務局に参加している青野司書と栗谷川司書から、鳥屋野小学校や坂井輪中学校など、市内の学校図書館の写真を提供してもらった。最後の方には、有識者会議での視察の様子を紹介させていただいた。

本日、フォーラム当日の写真をご用意した。A3判にまとめたカラー写真だ。職員が撮影したため、なかなか接写できなかったが、参加者が会場を埋めている様子など、当日の様子が分かると思う。フォーラム終了後に柳田さんのサイン会を行ったが、希望者全員へサインするのに1時間以上かかった。一人ひとりに対してとても丁寧にサインをしていたのが印象的だった。

これらを参照してもらいながら当日を振り返り、パネリストの皆さんは感想や言い足りなかったことなど、また、パネリスト以外の皆さんからは、感想を含めて発言してもらいたい。

(荒川座長)

4人のパネリストの方々は大変ご苦勞だった。それでは、パネリストの方々のご意見、ご感想を改めて聞きたいと思う。

(宮下副座長)

フォーラムでもう少し強調してお話したかったことは、子どもたちに絵本を読んでもらう、絵本を好きになってもらう手だてとして、私は自分の学校で実践していたのだが、よい本のリストをいろいろな方の力で作り、そのリストに基づいて、学校なら子どもたち、教職員、保護者の感想を、大好きな友だちや大事な人に勧めたい本、とても面白かった本、ただ読んだ本といったように、シールによって交流し合うことだ。

例えば、家族であればお父さんかお母さんが読んだ本を取り上げて、そこに読んだ人の意

見と、家族に勧めたい・おもしろかった・読んだという情報をシールで家族で知らせ合う。すると、そんなに改まった家族の会話がなくても情報交換や交流ができ、絵本を読むきっかけになるのではないか。

当日は時間がなかったが、何か楽しい手だてを実際に家庭や、学校・学級の中で普及させなければ、読む機会が足りないということを、もう少し強調すればよかった。

(佐藤委員)

有識者会議では、小児科医としての立場から、とりわけ乳幼児と親との関係を作るツールの一つとしての絵本、読書についての提案と、もう一つは、今の子どもたちがメディア漬けにされている状況を切り開く方法としての読書について提案してきたが、今回もそういう話をさせてもらった。宮下委員も盛んに言われていたが、特に子どもだけの問題ではなく、やはり親が本を読まない限り子どもは本を読まない、親にも読書の機会を増やしたいということから、ブックスタートの導入を提案した。

後半篠田市長から、新潟市の状況を話していただき、私も勉強不足だと思ったが、新潟市でも読書を誘導する政策をいろいろおこなっているようなので、さらに強化して授乳時期からの読書習慣を今後もこの会議で訴えていきたい。

(高野委員)

私は、時間をかなり気にしてしまい、言葉だけで話したが、やはり読み聞かせの場面のスライドを使って話をしたら、もう少し訴えられたのではないかと非常に反省した。

(足立委員)

当日の資料の中に、柳田さんの勧める絵本のリストが入っていたが、あれは非常によかった。いろいろご紹介してもらっても、書き留めるのはなかなか大変だ。私はそのリストを使って、さらに読みたいものを自分で買った。当日配布の資料が大変充実していた。

パネルディスカッションは、元々時間が無いと思っていた。私自身は、言いたいことが全部言えたので満足しているが、もう少し他の委員の発言と同時に、掘り下げていくようなところがあったらよかった。

(荒川座長)

会場で聞いた二人の委員に、感想をお願いしたい。

(正道委員)

柳田さんの講演内容は、大人が読む絵本というようなテーマを感じた。アンケートなどを見ても、その点がすごく伝わっている気がする。

パネリストの方々のお話が、時間がなくてディスカッションにならず、言っぱなしになってしまったことが残念だったことと、柳田さんの発言と、パネリストの方々とのディスカ

ッションが、もう少し発展できたらよかったと思った。時間的に無理というのは承知のうえで、あれだけの会を開くのだったら、やはりもう少し深まりがほしかった。

(間藤委員)

委員の方は、それぞれたくさん言いたいことがあるだろうと思いながら、そのあたりが言いつばなしで、かみ合わなかったのが非常に残念だった。あの時間の中ではしょうがないので、この会議の中でフォローしていけばいいのかと思っている。

(荒川座長)

私だけ欠席して失礼した。あとでフォーラムの記録を全部読ませていただいた。柳田さんのことは、前から興味を持っていたので、改めてなるほどと思った。今回のフォーラムに、市長が自ら出席されたことは大変よかった。

女性の参加が多く男性が少ないのは、少し問題があると思うが、学校関係者の参加が42人あり安心した。一般の方とPTAの方の参加についても、よかったと思った。

アンケートでの評価も、非常によかったという意見が多く、よくなかったという意見は、あまりなかったようだ。これをきっかけに、この会議で最終報告をまとめていくが、大きなインパクトになると思っている。

またこういう集いは、お金がかかるかもしれないが、有識者会議が終わっても、ぜひ開催してほしいというのが私の率直な意見だ。

(事務局)

事務局の中でも、意見交換をしている。基調講演とパネルディスカッションで、啓発されたという趣旨のアンケートが圧倒的多数だった。我々の仕事の中で、こういうイベントにいくつかかわったことがあるが、これほどアンケートが多く出て、非常に率直な思いが書かれていたことが、あまり経験がないので、少し驚いた。基調講演とパネルディスカッション共通で、「絵本の奥深さを初めて知った」という感想が非常に多かった。

教員の話が少し出たが、アンケートでは小中学校の教員のほとんどが同じ趣旨のことを書いており、私どもにとっては驚きだった。このような教育、子育て、本といったようなテーマのフォーラムに参加する人は、ある程度絵本や読書について関心をお持ちだと思う。そのような人にとっても、今回の講演やパネルディスカッションが、新鮮な驚きだったという受け止め方をされたことに、とても驚かされた。

今回のフォーラムのキャッチコピーとして、「チェンジ大人」という言葉を作った。大人が変わることが大事であると、有識者会議の中で何人もの委員から言われていたし、事務局でもそのような内容のフォーラムにしたいと考えていた。自由に記入していただいたアンケート内の「子ども読書活動を進めるために大切と感じたこと」を読むと、大人や教員が読書好

きになり、まずは読み聞かせを自分で楽しむことが大事であると、参加者が本当に素直に受け止めてくれた。そのうえで、行政的な努力として読書環境を整備していく、その順番がとても大事であると思う。決して他人事ではなく、自分のこととして受け止められたのだと思う。有識者会議のこれまでの論議を改めて振り返ると、とてもストレートにつながってくるという気がしている。

今回のフォーラムは、基調講演とパネルディスカッションを通して主催者側のメッセージが参加者に伝わり、しっかりと受け止められたのではないか。これらを計画の中に盛り込んでいくことが大事になると考えている。

全体として、荒川座長が言われたように、事務局もフォーラムのような取組みが必要だと思った。第5回の有識者会議で、政令市における取組みを紹介したが、その中に啓発事業があったことはご記憶かと思う。政令市でほとんど取り組んでいる啓発事業だが、少し斜に構えて、「予算が付きやすい」ようなことを言った。しかし決してそんなことはなく、必要ということだと思う。啓発事業は本市においても全く同じ状況ではないかと、アンケートを繰り返し読んでいった中で感じた。

(荒川座長)

大変有意義な会だったということであれしく思っている。ぜひ、このフォーラムの結果を推進計画に反映したい。

(2) 西蒲区学校図書館訪問を振り返る (資料2)

(事務局)

3月に2日間に分けて、中央図書館周辺の小学校、中学校の学校図書館や保育園での読み聞かせ活動などを視察した。その後の第4回有識者会議で、正道委員から、合併した市町村部で、司書のいなかった学校図書館を見学したいという希望が出たので、自主研修として5月21日に視察をした。

参加者は、正道委員と宮下委員の二人で、事務局も同行した。視察先は西蒲区の漆山小学校と西川中学校で、どちらも平成17年の合併後に、初めて学校司書が配置された学校だ。2校の視察後、学校図書館支援センターがある西川図書館と、今年の4月に新築移転した青野司書が勤務する鳥屋野小学校の学校図書館へも最後に立ち寄った。

参加した正道委員と宮下委員から感想などお聞かせください。

(宮下副座長)

どこの学校図書館もそうだが、一番は司書や司書教諭がどのくらい力量があり、自分の夢といった方がいいのだろうか、子どもに本を好きになってもらって、たくさん本を読んでも

らい、そこからいろいろなものを学んだり、育てていく。それを実現するための具体的な手だて、アイデアも含めて、トータルな力関係から、運営を後押しする学校において、学校図書館がどのようになっているのか見られる。

実際に行ってみると、予算や校舎を建てるときの図書室の広さなど、いろいろな問題があると思った。だからこそ、子ども読書推進計画における行政側の真剣な取組みが、第一歩を踏み出す前提となる基礎的な条件の整備に、どのくらい力を注げるのか、各学校図書館を見学させてもらい感じた。もちろん、次の段階で司書の力量をどう高めるか、先生方にどうアプローチしていくかなどの問題もある。多様な問題があって、新潟市の子どもたちを本好きにするということは、一筋縄では簡単にいかない。私は教員、校長だったので、教員に本を好きになってもらい、子どもにもというルートで働きかけているが、いろいろなルートが必要であると改めて感じている。

(正道委員)

最初に感じたのは、「思ったよりいいな」ということ。失礼な言い方かもしれないが、司書がいなかった学校図書館がどういう感じだったのか、どのくらい活動しているのかと思っていました。想像以上に司書が頑張っていて、いろいろ工夫しながら新しい本を子どもたちに手渡す努力をしていると感じた。

漆山小学校は、図書室という区切られたスペースではなく、ラウンジという名称で呼ばれていた。司書がくる前は子どもたちが走り抜けて遊んでいたスペースを、図書室の形に整えて、まずはその中を走らないところから子どもたちに教えていくような状況だった。今では、ブックリストを作って、リストの本を全部読み終わるとごほうびがもらえるというような、手を変え品を変えいろいろな活動をしていた。子どもたちを読書に向かわせるその努力を買いたいと思う。確かに、書架の並びが少し雑だったり抜けていたりしたが、抜けているのは利用されているからなのかと思った。

中学校もそうだが、司書はいろいろな工夫を本当に頑張っている。司書を支援するのは、市の役割ではないか。西川中学校は若い司書だが、図書室に映画のチラシなどが貼ってあった。一見読書と関係ないと思うが、子どもたちの心をつかんで、そのチラシの映画の原作本を読む子どもがいるなど、私がこれまで見てきた図書室とは違い、また別な風が吹いていた。全部画一的に図書の色合いを揃える必要はなく、それぞれの地区や学校によって、地域の子どもの様子も違うので、司書がそれに見合った本を手渡す努力をし、それに対して支援するのが市の役割ではないかと思った。

(事務局)

行かれなかった方は、分からない点もあるかと思う。補足をさせていただいたうえで、も

し質問等があったら出していただきたい。

一つめは、漆山小学校も西川中学校も、司書配置によって学校図書館が大きく変わったと、司書教諭が率直に話していた。それは素直に受け止められることと思った。

二つめは、両校の司書ともとても熱意があり、その思いが我々にも伝わってきた。子どもたちが本好きになっているのは確かなようで、両校の図書室の利用状況のデータを見ると、確実に貸出冊数が増えている。漆山小学校は、3年分のデータが出されていた。

資料をご紹介します。「平成21年度学校図書館指導計画」というA4横の資料は漆山小学校のものだ。その2枚目に本の貸出状況ということで、平成18年・19年・20年の学年、クラス別の在籍者数と、1学期・夏休み・2学期・冬休み・3学期・合計と、児童一人当たりの図書室の貸出冊数が出ている。平成18年は、全学年平均が25冊。19年度が44.4冊、平成20年度が68.1冊で、司書はかなり計画的に推進してきたと話していた。

1年目は、図書館がどのように利用されているのか何もせず見て、2年目になり初めておすすめ本の提案をし始め、3年目にシリーズごとに本を読む提案を始めた。普通、小学校の場合、2・3年生が一番本を読む年代だと経験的に感じられているようだが、漆山小学校の場合は、何とかして子どもたちに本を読んでもらい、正しい本に出合ってもらいたいという思いがあり、2年、3年たって学年が上がって、5・6年生になった今でも、かなり本を読んでいるということだった。

西川中学校の資料で、7ページの「たより」は、司書が教員向けに作成した「職員用図書室だより」だ。平成19年度と20年度分の利用状況、貸出冊数のデータを学年別・月別にした表がある。平成19年度の貸出冊数が1,161冊、20年度は2,368冊で、決して多いとは言えないが、1年でこれだけ学校図書館に目を向けさせたのは、やはり司書配置のおかげではないかと、司書教諭が言っていた。

三つめに、両校とも「朝読書」を毎日実施していた。その効果を両校の司書教諭とも言っていて、朝の一斉読書がなければ、子どもたちは本を読まなくなるのではとも発言していた。昨年の第1回有識者会議の際、事務局で整理した「現状と課題」に、新潟市内の小・中学校における全校一斉読書活動の取組み状況のデータ(平成19年度)があった。すでに新潟市は全国平均や政令市平均より高いレベルにあったが、1年後の平成20年度は、小学校、中学校とも100%の実施になった。

平成20年度に、新潟市教育委員会が文科省へ提出した学校図書館に関する調査の中に、毎日一斉読書を実施している学校のデータがある。小学校、中学校とも毎日実施している学校が、どちらも19校。市内に小学校が114校あるので、割合は16.7%。中学校は57校あり、割合は33.3%と、昨年度の数字より上がっている。漆山小学校も西川中学校も、毎日朝読書

を実施している。漆山小学校では、ボランティアが朝読書の時間に読み聞かせを計画的に実施している。スケジュール表を見ると、漆山小の読み聞かせグループは現在8人で、そこに司書も入って、毎週1回読み聞かせをしている。

有識者会議で、学校図書館を使った授業の提案を何人かされていたが、西川中学校でまさにそれを実施していた。総合学習だけではなく、教科授業の中でも学校図書館を活用していくことが、学校の教育目標の中に位置づけられていた。

両校とも西川図書館からの団体貸出を非常に活用していた。漆山小学校では、休み時間に司書が西川図書館へ本を借りに行ったり返しに行っている。西川中学校では、西川図書館だけではなく、周辺の白根や月潟図書館も活用しながら、司書と司書教諭が役割分担をして、公共図書館の本を借りている。西川中学校は蔵書が約1万冊あり、文科省の学校図書館図書標準をほぼ満たしている状況で、部外者からすると、図書標準を満たせば、学校図書館の蔵書だけで授業に活用できると思いがちだが、決してそんなことはなく、やはり新しい資料を子どもたちの数や、授業に合うように用意するのは、学校図書館だけではとても無理ということが、話を聞いて非常によく分かった。

(荒川座長)

資料を見ますと、50万円、100万円という図書購入予算の数字が出ているが、この辺りが小学校や中学校の学校図書館の予算額と理解していいか。

(事務局)

ここにでてくる50万円は、昨年度末に教育委員会から追加配当された額だ。

(荒川座長)

プラスアルファということか。

(事務局)

ボーナス分みたいなもので、学校図書館の図書標準を平成23年度までにすべての学校で達成するという目標が、新潟市教育委員会としてあり、図書標準にかなり届かない学校へ、年度末に教育委員会の予算をかき集めて割り振りして、追加配当している。

(荒川座長)

昨日、私は市内のある高校の保護者会に呼ばれて、大学進学などの話をした。その高校の校長先生が、図書購入に年間で100万円ぐらいしか出せないと言っていた。私は大学入試センターの仕事をしているが、試験のある科目の教科書が40～50冊ある。通常、各高校に1冊しか教科書を取れない。実はセンター試験というのは教科書から出題されることが多いが、自分の読んでいる教科書は一つだ。科目全体の教科書を全部揃えたとしても100万円そこそこなので、とても買えない現実があると聞いて、まさに寂しい思いをした。高校でもそんな

状態なので、なかなか厳しいとは思いますが、もっと予算を出してほしいと感じた。

(足立委員)

西川中学校の取組みが素晴らしいと思って拝見した。資料を拝見しながらいろいろと思いついたが、読み物に力を入れると、学習での利用は総体的に下がっていく。特に中学校、高校などでは読み物ではなく、学習に利用する図書に力を入れて、蔵書構築をしていただきたいと思っている。

私は、外国の優れた学校図書館を訪問するのが好きで見て回っているが、すごい学校は、図書館の本を使って学習するだけではなく、教師の教材が図書館の中にある。教材や教師が指導するための資料が、学校図書館の仕切られた横に置いてあり、学校図書館の資料を使ってその場でコピーできたり、カリキュラムづくりをする際、図書館に教師が集まり、その資料を使いながら話し合いをしている場面を見た。有識者会議でこういうことを申し上げるべきではないのかもしれないが、西川中学校の取組みは非常に素晴らしいので、最終的にはそういうところを目指せばいいのではないかと思う。

(事務局)

もう一つ西川中学校の紹介をさせていただく。司書教諭は、とても熱心な先生で、西川図書館に昨年度から設けている学校図書館支援センターの運営協議会委員をお願いしていた。2枚目の「朝の読書学習指導資料」は、朝読書の進め方について書いてある。一番面白かったのは4番目の「予想される問題点とその対策」で、内容が傑作だ。例として、「読書しない生徒には、全校一斉の迫力で押す」「集中できない生徒には、10分だからと言い含める」「8時20分に始められない生徒には、毎日のことだからと励ます」「本を選べない生徒には、好きな本でいいのだからと繰り返す」「面倒がる生徒には、感想文書きなど絶対にないと保証する」。素晴らしいユーモアだと思う。悲壮感ではなく、楽しみながら先生も実施していると思うし、学校の資料で、このようなほほえましい内容を見て、とてもうれしくなったので紹介させていただいた。

(宮下副座長)

学校図書館の話が今話題になっているが、私は新潟市内では下山小学校、亀田東小学校と白山小学校にいた。下山小学校は830人程、亀田東小学校は730人程、白山小学校は220人程の児童数だ。

一つめは、学校図書館の予算の話だが、私はだいぶ力を入れて、職員に図書館を充実させると言って100万円つけた。100万円は他の大規模校の図書館と比べると、かなり多い方だった。130万円を超える学校はないと思う。本当に予算が少ない。それも本だけではなく、いろいろな資料や消耗品も入れた100万円なので、大変少ないと思っている。予算が決して

潤沢ではなく、かなり貧弱であるということだ。

二つめは、時間の話だ。全校で毎日読書を実施している学校が増えている話を今聞いたが、実際はインチキではないかと思うくらいに、読書をする時間が減少している。新しい学習指導要領では、1時間ずつ授業時数を増やすように言われている。どこを増やすのかということになると、読書が一番最初にやり玉にあがる。今までなら、自由に読書をしている時間は無計画なものなので、授業ではない。ところが、それを国語の時間に含めることになると計画的になり、例え15分ずつ、10分ずつであっても、5回実施すれば10分で50分になるわけだから、1時間単位に数えられる。そうなる、口実であろうとそれを支えるために、かなり緻密な計画がなされる。そんなことはできないので、読書の時間を削ることになる。間違いなく、今、増えることはなかなかない。学習指導要領では読書がとても大事であると書かれているが、時間的にはそんなことはない。実質的な統計よりも僕らの勘の方が遙かに当たる部分が多いので、なかなか厳しい状況にあると思っている。

(正道委員)

今回、感じたことなのだが、司書教諭、司書の努力でこれだけのものができている。逆に言えば、よほどの努力がないと、ここまではいかないという現実がある。

漆山小学校では、西川図書館から本を借りる場合に、司書は自分の車で取りに行き、全部終わってから返しに行く。その際には、勤務時間中に行けるよう、校長先生の理解をいただいている。理解がないと行けないようなこともあるわけだから、配送システムを確立するなど、個人個人の努力や熱意にたよるだけではなく、システム化してサポートするようなことが、新潟市でできたらいいと思う。

(荒川座長)

かなり努力している学校を視察したということで参考になると思う。ぜひ、この推進計画に活かしたい。

(3)「子どもの読書活動を効果的に進めるには」－間藤委員からの提言－

(事務局)

1月21日の第2回有識者会議で、委員全員から「子どもの読書活動を効果的に進めるには」ということで、それぞれご意見、ご提言いただいた。当日、間藤委員は欠席で、その後、お話をいただく機会を持てなかったもので、今回、改めて間藤委員にお願いし、レジュメを作成していただいた。レジュメをご覧いただきながら間藤委員の提案をお聞きして、その後、意見交換をお願いしたい。

(間藤委員)

基本的なところを言うと、皆さんがいろいろなところでおっしゃられたり、この間のフォーラムを通して提言されていたので、私自身が改めて提言するようなことはないくらいだ。逆に少し変なところでひねくれて、臨床心理学をわざと持ち出してみた。

全体を通してみると、読書活動は大切であるといろいろなところで行われているし、それは間違いないが、もしそれがなかったり、不十分だったりすると、マイナスのイメージにすぐつながるようでは、非常にまずいのではないかと、少しひねくれたところもちよこちょこと入れてみたかった。

臨床心理学をもち出したのは、それが心理学という学問の中で、唯一科学的でない特別なものの見方をする心理学だからだ。客観性、論理性、普遍性という「科学の知」の基本的パラダイムでつくられる一般的心理学とは非常に違う、「臨床の知」のパラダイムを用いる。

それは象徴性（シンボリズム）、コスモロジー、身体性（パフォーマンス）である。コスモロジーとは人間の心を一つの小宇宙であるとする考え、身体性は、人は生身の身体を持っていることで、例えば正面から向き合う場合、横にいる場合、後ろにいる場合など、お互いの位置関係だけでも、そこにいる人の心に大きな異なる印象や感覚を生み出す。それをわれわれは「身体性を帯びている」とも表現する。そういう微妙な一種の気配、これは多分脳レベルでは測定可能だと思うが、日常的な感覚では客観的な測定はとうてい不可能だ。

読書活動という行為は、むしろ人間的行為というふうにとらえて、少し違う視点から考えてみようと思った。

人間の心というのは、一種の価値観、非常に分かりやすく言えば、好きか嫌いかという感覚が、とても重要な要素になっていると考えられる。臨床心理は、そういうところをわりと基本においているし、人は物語的存在であるという言い方も、されてきている。物語的存在というのは、いったい何なのかということを含めて、ある意味、哲学的・基本的な構えのよなものがあるので、読書活動も少しそうした背景から見ていきたい。

一つは、読みきかせてもらうということは、人と人との関係の中で、いろいろな状況において行われる行為で、もしかしたらここに一種の好き嫌いが出てくるのかと思う。好き嫌いというのは、人と人との関係だけではなく、絵本の好き嫌いなど、さまざまなところに出てくる。

聴くという行為は、読みきかせてもらうわけだから、一見受動的だが、実際にはここで能動的受動性という言葉を使った。カウンセリングの場面では、我々がクライアントの話を聴く時には、非常に積極的な感覚で受動的に受けていく。カウンセラー側が積極的なアドバイスを言うことはほとんどない。あくまで能動的受動性を大事にする。先生の話をもっと聞きたい

我慢すればという気持ちだけでそのまま終わってしまえば、何の意味もない。10分間だけ我慢するという行為の中で、「これは」という姿勢が生まれるのか生まれないのかというところが、勝負どころという気がする。先ほどの西川中学校の取組みは大変おもしろいが、そこまで考えてみることは、もっといいのではないかと思う。

特に読み聞かせのような場合、私は体験と経験というのは森有正的、と書いたが、少し説明が足りない。森有正は、あらゆる体験をたかが体験にすぎないと言っている。その中で、心のどこかに刻み込まれて残っている、そのことによってその人自身を変えていくものが経験なのだと言っている。だから人は経験的存在であるという言うことができる。

これは人間は物語的存在であるということと、ほとんど同意に考えていいのではないか。難しいことをいちいちやりながら読書活動をするわけではないが、通り過ぎていくだけの無意味な、たかが体験ではなく、子どもたちの中に何かの形で残り積もっていくのか、どうすれば可能なのか、などの技術的なものが注目される。しかし、読書活動や読み聞かせの場合の技術というものは、決して読み方の上手・下手というのではない。もう少し人間的なものの意味での技術である気がする。

読み聞かせは声に出会っていく。そうすると多分、好きな声、嫌いな声があると思う。例えば声のいいお坊さんのお経は、なぜかありがたく感じる。もし私たちが人の心に響くような声の種類を意識するならば、あってもいい。読みきかせる側の中には、非常に多くの情報が含まれた形で入ってくる。それをどのように経験するのか、経験につながっていくのか、簡単には分からない。しかし、それはそれで、こういうさまざまなノウハウ、上手・下手ということを越えて、どんな人が、自分とフィーリングが合うのか合わないのかということも多分にある。読み聞かせという活動の中には、そんなものも微妙な形で入ってくる。これが読み聞かせてもらうということ、あるいは読書活動の一つでもある。

一人で読む場合は、当然黙って読むわけだから、低学年では難しいと思うが、高学年になっていけばいくほど、そういうことが本当に大事になってくる。例えば高学年になっていくと言葉や思想に出会っていくことが、何かものを考える際、小学生なりにこういう言葉を使う、こういうことが分かる、こんなことが言えるなど、読みきかせの場合も同じだが、一人でじっくりと向き合う中で、そうした経験も生まれてくる可能性がある。

私がわざわざ言うほどでもないが、本のテーマの魅力というものもある気がする。読書活動の中では、テーマが本を読みたいと思うきっかけになるのではと思う。私自身の経験だが、自分で本を買ってみようとするときに、少し「あれっ」と思って引っかかってみるのが本や若者に出会うきっかけになったという経験を何回もした。例えば先ほどの森有正は、全く知らなかったのだが、『遙かなノートル・ダム』という題名が格好良く、言葉が好きだと

感じた。それで手に取って見たら、大変難しいが、経験と体験はいかに違うのかということが書いてあり、そこから森有正について非常に興味を持ち、彼の『バビロンの流れのほとりにて』などに出会っていく。このように、さまざまなテーマに惹かれていくこともあるのでは、と思う。

最近では、後藤竜二の『12歳たちの伝説』という小説が面白い。実は青陵大学の修士論文を書く学生で、友人が小学校の先生だと言う。そのクラスの中で論文につながる研究をやってみたいということだった。そこで子どもに読みきかせてあげるような児童文学で、何かよさそうなものはないかと図書館司書の知人に聞いたら、すぐに、「それなら後藤竜二の『12歳たちの伝説』というのが面白いので、役に立つかもしれない」と答えてくれた。早速買って読んでみたら、読み聞かせにいいと思った。先生がクラスの子どもたちに毎日5分でも10分でも読み聞かせるならと思ったが、全5巻もあり、相当長い時間が費やされてしまうので、結果的には無理だったようだ。修士論文としては挫折したが、これは試してみる価値があると思った。

3番目の「場の時空的体験」は、沼垂保育園に行った際、2～3歳くらいの赤ちゃんといってもいいくらいの子どもたちが、先生の読みきかせを熱心に静かに聞いていた。一般の幼稚園だとざわざわして、うまくいかないことがある。

学生の教育実習の巡回指導をしていた時代だが、糸魚川にある園長先生がお坊さんの幼稚園での話だ。朝、10分くらい本堂のようなところに集まり、子どもたち全員が園長先生の話聞く。普通の幼稚園だと、3歳クラスの先生たちは、子どもを注意するために園長先生の話全然聞いていない。ところが、その幼稚園の先生は、子どもたちを全然見ていない。子どもたちはちゃんと園長先生の方を向いて話を聞いている。3歳の子どもたちは、話の内容は分かっていないと思うが、それでも静かに聞いていた。それには驚いた。なぜこういうことが起こるのか聞いてみた。本堂のすぐ横に、畳の敷いた空間があるのだが、お母さんたちが時々やってきて、何か園に関係のある仕事をしている。普段そこは子どもが入ることはできないのだが、静かにしていれば、そこで遊んでもいいという約束があるのだそうで、子どもたちは結構その辺で遊んでいる。お母さんたちは仕事をしている。大きい幼稚園で、十分に遊ぶ空間があるのだが、なぜかおとなしく遊んでいて、意外に子どもたちの出入りがある。こういう経験から朝の子どもたちの姿が生まれるのかと、すごく印象的だった。

ちょうど同じ年に、別な保育園を巡回することになった。今度はお寺の保育園だったが、本当に同じようなことで、子どもたちが静かに話を聞いている。これはもしかすると、そこにある空間というのは、静かにする場所なのだというのを、どこかで経験しているのだ。園長先生のお話は、1週間に1回しかないのだが、特別な感じがどこかであるのだろうか。

子どもたちは話の内容が理解できなくても、毎週月曜の10分間だけは静かにする時間と空間ということを経験するのだろう。

本を読むときにも、そういう経験を作り出すことができるかもしれない。本を読んだり、読みきかせてもらうということ、特別な時間と空間にする。日常ではワンワン遊んでいても、そのときだけは別という自然な教育が、とても大事だということを経験した。

沼垂保育園の子どもたちは少人数でもあるし、やりやすかったと思う。日常的に絵本を読んでもらうときは、静かに聞くということが、読書活動の中にあるのではないか。こういう特別な時間と空間という感覚を、どこで子どもたちに経験させ、自然なものとして受入れさせていくかという工夫を、テクニックとして私たちが考えてもいいのではと思う。だから読書活動という行為は、テクニックの問題もあるのではないか。気持ちだけ一生懸命やるというよりも、テクニックが意外に効いている気がする。

提言ということでは、先ほどから、大人への呼びかけが大切だと言っていたので、あえてもう一回繰り返すことはないと思うが、本の世界を私たちが経験していくことによって、本を好きになっていくのだと思う。

レジュメの2ページ目だが、これも皆さんご存じのとおり、絵本の読みきかせは、大人になっていけばいくほど、絵本を読むときは字ばかりを追う。読みきかせてもらう方も字を読んでいる場合がある。子どもはそういうことはないと思うが、学生などへは、「読むときは絶対に字を見るな」と言って絵を見せるのだが、やはりつい字を見る。絵本をめくるときは、映画と違い不連続になる。その間に非常に微妙だが、ある種の連想や想像が生まれる。これはマンガを読むときもそうだが、マンガはコマからコマへ飛んでいくが、その瞬間にすごく脳が活発に動いて、想像力が働いているのではないかと思う。今聞いた言葉の刺激、絵の刺激からスッと何かをイメージすると、とても短い時間の中で、非常に膨大な経験がなされているかもしれない。そうすると、絵本の場合は、少し丁寧に読んでめくっていくことを意識する。文字の場合は、あまりそうしなくてもいいのかもしれない。

先ほど一番最初に申し上げたが、読み聞かせは、豊かな教育的効果があるという言い方に対して異論は全くないのだが、あまり一生懸命になると、何が何でも読書ということになり、逆なことがあり得る。本がすべての子どもの経験ではなくて、さまざまな形で、いつか出合っていくものではないかと思う。自分のことを考えてみると、子ども時代はろくな本もなかったし、あまり本も読まないで遊んでいたのが、あるところから急に何かに出会って、夢中になって本を読むということ、多分どこかで経験していたのかもしれない。セルモーターがかかったまま実際には動かないで、エンジンがずっとかかったままだったのだと思う。いろいろなところで、思いがけない経験となっていることがあると思う。

この間、講演の中で柳田邦男さんが、『ルリユールおじさん』を紹介されていたが、この『1000の風 1000のチェロ』は、同じ作者のいせひでこさんのものだ。非常に内容の違うもので、『ルリユールおじさん』は臨床心理学的に言えば、男性原理と女性原理、あるいはアニマとアニムスが見事に統合された形で、内容的にすばらしい絵本に見える。

いせひでこさんの経験を元にした『1000の風 1000のチェロ』は、母性原理、女性原理が貫かれていて、とても癒しの効果があるようだ。この本は阪神淡路大震災で亡くなった人たちを鎮魂するもので、チェロ奏者たちが大勢集まった中に、主人公も参加しチェロを弾くという内容だ。

絵の描かれ方は同じだが、内容は非常に違っている。二つの異なった絵本をただ単に読みかせるのではなく、例えば学校の先生たちが「こういうのはいいね」というのではなく、どこがいいのかを勉強しあたりすれば、先生自身が絵本の良さに気付くことがいくらかもあるのではないか。私などは学生に教えたり、自分が人に読んでやったりして、そこからだんだんと人の反応を聞きながら、自分の中で、この本はもしかしたらこういうものがあるのかなどと気付くことが多いし、すぐに見て分かるものではない。絵本は難しい。情報が非常に少ないだけに、いい本だと人から紹介されると気付きやすい『ルリユールおじさん』は、柳田さんの講演以来、ひっぱりだこだ。たくさんの人が読んで、それぞれの思いで見ていると思う。この一冊だけでたくさんの人生に関する情報のようなものが入っていて、大変おもしろい。

ついでに、私が小学校の先生だったらやってみたいと思ったことがあるので紹介する。これは『だるまさんが』(かがくいひろし作)というすごく簡単な絵本だ。「だるまさんがどてっ」「だるまさんがぷしゅーっ」「だるまさんがぷっ」おならだ。「だるまさんがびろーん」「だるまさんがにこっ」というこれだけの絵本だ。その続きに『だるまさんと』や『だるまさんの』という絵本がある。例えば小学校の1・2年生の子どもたちに、『だるまさんが』のシリーズにないものを考えてみてもらう、『だるまさんと』になったらどうなるだろうかと考えさせてみたい。こうなると足立先生の領域だが、たった一つの言葉によって、想像が違ってくる、広がってくるということなども、言葉に対する感受性を作っていくのおもしろいと思う。

もう一つ紹介すると、『したのどうぶつえん』(あきびんご作)という絵本がある。これは「上野動物園」ではない。『したのどうぶつえん』だから、「上野動物園」にないものがたくさんある。ここには、かばばす・くまくるま・ばくばいく・とらとらっく・しまぶた・しまうし・のこぎりん・きりんご、そんなふざけたものだが、これがものすごく評判を呼んで、全国から、僕だったら私だったらこうするという投書が送られてきた。この姉妹編として『し

たのすいぞくかん』という絵本もある。これもおもしろい。

このように言葉遊びを楽しみながら、子どもたちへ言葉に対する感受性の世界を、教師の力量でいくらかでも広げられるのではと思いながら、持ってきてみた。

こういうところで読書活動というと、まじめな本が多い。『したのどうぶつえん』や『だるまさんが』は、図書館では買わない絵本かもしれないが、こんな絵本を使って教育現場の中に行ってみると、子どもはのってくると思う。おもしろい絵本があれば、今度は本に興味を持つということもあり得るのではと思う。でも、あり得るというのではなくて、「かな」だろうか。こういうことに何人かが食いついてくれば、おもしろいのではと思う。

(荒川座長)

ただいま提言として7項目くらい、主に大人の役割というお話で伺った。皆さん何か質問やご意見はありますか。第2回会議では、それぞれの方々がご自分の提案を出されたが、改めて今日何かありますか。

(佐藤委員)

先生の話聞いて思い出したことがある。乳児期に話をきちんと聞く時間を持つことが、非常に意味があると言われたが、20年近く前に、私は青陵短大(現・青陵大学)で育児学という講座を持った。講義の最中、学生たちはずっとしゃべっているが、ちゃんと私の話は聞いていて、冗談には笑う。あるとき控え室に戻ったら、非常勤の老齢な先生が、「みんなテレビを見ているんだよね」と言った。「テレビを見て育っているのです、その前でしゃべっても誰も怒らない。テレビを聞くことと同じ感覚で、講義も聞いている。全然悪気はないので、怒ってもしょうがない」と言っていたことを思い出して、子どものときにきちんと話を聞くという当たり前のことを経験するのは、とても大事なのだと改めて思った。

(事務局)

沼垂保育園での視察のときの写真を、今回の「にいがた子どもと読書」に載せた。非常に面白い写真がたくさんあった。子どもたちはみんな絵本の読み聞かせに集中しているのだが、お腹を出している男の子がひとりいる。何でみんな静かに話を聞いているのかと感じた。斉藤補佐、保育園における読み聞かせが、生活の一部になっているとのことだが、どうやってその姿勢が身につけられてきたのかなど、聞かせてもらえるか。

(斉藤)

意識的につくる。確かに保育園や幼稚園では、環境が大切だと言われている。保育室の中に、興味を持ったらすぐ手に取れるように絵本などを自然に置いておくので、読め、読めという感じではない。環境を通して保育と言われているので、そこから子どもたちが興味や関心を持って絵本を手にとったときに、保育士が読んであげるなど、スキンシップを図りなが

ら、その心地よさが多分大切なことかと思う。親や保育者のぬくもりなど、絵本が一つのツールになるというお話に通じると思う。

(間藤委員)

沼垂保育園の視察の際、私たちはぼっぼ焼きをもらった。ぼっぼ焼きを出してもらうのはなかなかないことだが、和やかで、もてなす雰囲気というのか、先生方のチームワークがそこで感じられる。ああいった雰囲気で、子どもは落ち着くと思う。本当に微妙なことなのですが、私たちの仕事というのは、イメージとしてそこに人の気持ちが和らぐような、思いがけないところにふっと表れてくるものを感じる。あのとき、とても気持ちがよかったし、おいしかったせいもあるかなと思う。

(高野委員)

間藤委員のお話、大変勉強になった。

間藤委員が読んでくれた『だるまさんが』はとてもこちよかった。大人が聞かせてもらっても、絵本はあたたかくて心が豊かになる。読み手が一冊の絵本から子どもたちにどんなメッセージを伝えていきたいのかを、しっかり持つようにすることがとても大切だ。読み手と聞き手の心と心がいかに通じ合っているか。なぜなら、読み手によって一冊の絵本が深くなるか浅くなるか左右される部分があるからだ。このことこそ、読み聞かせにおいて忘れてはいけない。

(荒川座長)

この会議では読書に集中して話をしているが、全体の教育の中で、読書と他の教育とは無縁ではないわけなので、その辺は大事なことだ。

(正道委員)

私も普段から感じていることなのだが、先ほど高野委員も話し、間藤委員のレジュメにも書いてあるが、読み手がわくわくして読んだら、それだけで聞き手は本の世界にスッと入り込む。勉強のため、言葉を豊富にするために読もう、とか、義務で、読んでよい子に育てるために読むということでは、かえって伝わってこない気がする。間藤委員が言ったように、読んでくれる大人を好きになり、その大人との間に信頼ができる。その効果は、誰とでも保証されているわけではない。それは大きな声で言いたいと思う。

この間、柳田邦男さんもいい事例をいろいろ話していたが、誰でも絵本を読んであげていれば、将来いい子に育っていじめもないかと言うと、絶対にそうではない。ただ、本を読んであげることで人間関係がよくなるし、言葉もふんだんに、活字に対する抵抗力がなくなる。物語の中には、すてきな世界があると知らせることは大切だが、それこそ、よい子に育てるためという感じが最初にくるのはちょっとだめだ、というところは、私も同意見だ。

(宮下副座長)

柳田先生の話も、間藤委員の話もそうだが、いろいろな人から、「この本おもしろいよ」というおすすめの本のリストを知りたい。私は、ほんぽーとに出されてある本のリストを見て、自分が今まで読んだことのないものに印を付けて、毎回のよう借りて読む。私の家族たちも読んで感想を言いかうと、私とまた感想が違ったりして、そんな簡単に「すごくおもしろいね」という意見が一致しない部分もたくさんある。それもまたおもしろいし、そこでの選書、リストづくりの目の確かさ、いろいろな人たちの目につくった本のリストが大事ということが、第1点。

2点目は、子どもが好きになるだろうと思われる本もたくさんあるのではないか。例えば『ぼくのかわいくないもうと』という本は、お兄ちゃんがいて、妹がいるが、大変おてんぼというわけではない。でも、そういう状況の子どもにとっては、それがたまらなくおもしろい本になる。両極端に逆の場合も、たまらないおもしろさが出る。でも、そう思わない子どもたちもいる。その子どもたちの生活や気持ちやいろいろな状況に合わせて本を勧めることも、大事なことなのではないか。本の題名だけを知っていても、なかなか勧めきれない。やはり何か一言解説があつて、こんな子どもたちに、と言ってもらわないと、なかなか厳しいものがある。子どもたちに豊かな読書体験や読書を好きにさせる運動や取組みについて、みんなが知恵を出さなくてはいけないのではないか。これから計画のあとに、具体的な場面で子どもたちに本を好きにさせる手だてを考えていかななくてはいけないと思ひながら、間藤委員のお話を聞いた。

(事務局)

間藤委員にお聞きする。第1回の有識者会議の際、三条市で青陵大学と文科省の科学研究費か何かを使いながら、3か年で子どもの読書や読み聞かせについての取組みをするようなお話が少しあつたと思うが、そのことをどんなふうに進めているのか、具体的にお話しいただけるか。

(間藤委員)

この発想は私ではない。臨床心理という学問は、意外に児童文学やファンタジー、絵本などに興味のある人たちが多く、人間を扱うのに、とても様々な方で利用しやすいところがある。現実はこのうケースというのはなかなか難しいが、このうことを通していろいろ好きなことをする。大学の先生方の中に、このうことに大変興味を持っている方がいて、「絵本を読む会」を私たち3人で続けている。その中に研究班長で橘先生という方がいる。この方は三条市と、絵本だと思ひが、何らかの形で読書に関するつながりを持っていて、それが出発点となつて、大学院で何か立ち上げようこのうことになった。こんなものは通らないか

もしれないと言いながら、当時、大学院としては少し変わったテーマだが、読書活動、絵本の読みきかせ効果というようなネーミングで出したら、たまたま通ってしまった。

今まで6・7回ほど、三条市の保育園連盟というのだろうか、多分私立の保育園だと思うが、百数十名の職員がいるはずだ。その人たちが交替で、私たちとディスカッションする会を行っている。夕方の保育がだいたい終わった人たちが、1回だいたい50人くらい、メンバーはかなり替わるが、そのときによって、最初から最後まで絵本の紹介をすることもある。こちらが「こんな絵本はおもしろいですよ」と紹介したり、また別な角度から、「もしかするとこの本はこのような意味があるのでは」など、そんな話をしたりする。

今度は向こうの先生方が、自分の好きな本をお互いにみんなで読み合って、いくつかのグループに分けて発表し合い、私たちがそこにコメントする。あるいは私たちが絵本を紹介して、その本を各グループに何冊貸すので、それぞれで、私たちの話を受けてディスカッションをしてもらい報告する。何をするという事は必ずしも決まっていはいない。その先生方に任されている。今年度はまだ1回も開催していないが、もう一回それを総括して、これからどのように続けていくかということになると思う。

一番最初は、まず150冊絵本を選定して買うということだった。予算が500万円もついたものだから、それをどう使うかということで、まず絵本を買うことにした。ところが、150冊の絵本を選ぶのは大変な作業だった。私のところはかなりストックがあったが、多くは絶版になっている。絵本の再版は非常に難しい。ものすごく人気のある絵本は別としても、ある絵本はいいと思われていても、それほど売れそうにないと、コストが多分かかると思う。半分くらい絶版になっていて、どうしようもなく、新しい本を選ぶという作業が意外に大変だった。

特にやさしい口調で、外部からも非常に読み聞かせが上手だと言われている臨床心理士だが、長い間臨床経験をしていると同時に、現場を持ちながら絵本に興味を持ち、読みきかせたりしている方が、赤ちゃん絵本のようなものを持ってきて、私たちに読みきかせてくれた。すごく聞いていて快い。そういうことなど、本当にバラエティに富んでいる。今年はどうするのか分からないが、そこから向こうの先生方が何を手に入れていくのかは、これからのことだと思う。

私は、実は本読みグループをたくさん持っていて、『だるまさんが』は、あるグループの方が紹介して読んでくれた。一番上の方が80くらいのおばあちゃんから、一番若い人が50代くらい、元先生といま先生という人たち30人ほどのグループだ。このグループは毎月いろいろな勉強会をやっていて、私は時々そこに参加しているが、そのときに紹介された絵本なのだ。公的ではないが、地道にプライベートな形でいろいろな読書活動をおこなっている人た

ちが結構いる。

(正道委員)

絵本の絶版については、間藤先生の言うとおりで。出版社も動かない在庫を抱えたくない
ので、売れ行きの悪い本はすぐに版元品切れや、絶版になる傾向がある。

(荒川座長)

宮下委員にお聞きしたい。読書活動がある意味、学校教育の一つとすると、もう一つ、国
語の授業があるが、この辺りはどうかかわりがあるのか。

(宮下副座長)

国語の授業は、かつてと比べるとコミュニケーションや、言語事項を子どもたちにしっか
りと植え付けようということが主になりすぎている感じがある。今は情緒的な国語教育が少
なくなり、具体的な生活に役立つ国語をしっかりさせようと言われているのではないか。30
年前の国語の授業は、同じ教材、例えば「一つの花」など、全国一律にみんな経験している。
それこそ笑い話だが、佐渡のトキの話で「最後のトキ ニッポニアニッポン」は、みんなが
一度読んだことがあって、そこに出てきた人の名前など、全国共通に出てくる。佐藤春夫さ
んの名前もそうだが、状況も分かる。

ところが今、国語の教科書に載ってくる教材は、あっという間に変わる。残っているのは
「ごんぎつね」など、ほんのわずかだ。そうになると、教える側も豊かな読みができない。つ
まり、昔一回授業して今度もう一回授業をする際には、また違った発想でというような国語
の授業が成り立たない。新しいものだから、参考資料を読みながら、大事なことだけを教え
ている。そんな授業が多くなりつつあって、きっと物語文、皆さんが熱意を込めてお話され
ているような、情緒的なもの、例えば人間の生き方とかかわるようなものについては、国語
の授業で教えるものではないと言われかねない。私たちの思うような国語の授業とは違うこ
とが、今、進められているのではないかと思う。

(荒川座長)

最近では、数学者の藤原正彦さんが、「一に国語、二に国語、三四がなくて五に算数」だっ
たのが、最近「五も国語」となってしまったと言い、文化勲章の岡潔さんは、「数学は情緒
である」と、同じことを言っている。今お話をお聞きして、私は素人だが、読書活動と国語
教育というのは無縁ではないと思った。

(4) 今後の取組みについて

(八木館長)

今後の取組み、この会の持ち方ということで提案する。全体の日程スケジュールでは、本

来なら今回が計画づくりの骨格を呈示する予定になっていたが、フォーラムも終えて、ここで一つの締めにして、もう2回程度の会議で素案づくりに入りたいと思っている。当初の予定では、9月と11月くらいというつもりでいたが、第7回の会議を8月下旬、第8回を10月前後にお願ひできればと思っている。次の7回と8回で素案づくりをして、その後、パブリックコメントを求めて、3月くらいに最終的な修正の形でもう一度確認していただこうと思っている。

もう3回、8月と10月に第7回、第8回、来年3月に第9回という予定で考えている。

(事務局)

これから事務局では、計画づくり・素案づくりに取り組んでいく。委員から、いろいろ発言をしていただいたが、それ以外にもこういうことを調べてほしい、計画の中に盛り込んだ方がいいのではというような提案があれば、できるかどうかは別だが、話していただきたい。

(宮下副座長)

私はこの間、『卵と小麦粉それからマドレーヌ』という本を読んだ。内容は親がトンでいる子どもの話だった。

このメンバーの中で話題になったことが、絵本が有意義であり、絵本でというお話だったが、私は学校の現場にいたので、中学生や小学校高学年の年代が耐えられる本のリストや、そのことについても検討していただきたい。絵本だけで終わってしまうと、そのあとどうなるのだろうと疑問に思う。確かに絵本をいっぱい読んだ子どもたちや、中学年まで読んだ子どもたちが、そのあと中学校へ行って途切れても、大人になってまた時間ができれば読むようになるという希望的観測は確かにあるが、もう少し橋渡しを確実にしておきたいので、何かそのような計画があれば大変ありがたい。これが1点。

2点目は、絵本の話だが、以前、絵本が介護施設の痴呆やいろいろな人たちにも役に立つという話をどこかで聞いた。今、押すといろいろな童謡が流れる絵本のような童謡の本があるらしい。絵本なども聞いたり、見たりすることで、その威力というようなことについても、どこかで研究されたことを知らせていただければ、大変ありがたい。

(荒川座長)

実は、最後のところで申し上げようと思ったのだが、私は今、高校を回っていて、受験勉強や、進路指導などいろいろなことをしている。その間に読書というのはどうなのだろうかと疑問に思っていた。今日は絵本のオンパレードだったので、少し申し上げておこうと思っていたが、宮下委員から代わりに言っていた。ぜひ中高校生のことについて、皆様のご意見をいただければ、もっと広がると思うので、よろしくお願ひしたい。

(正道委員)

私たちは新潟市で作った図書館の絵本のリストはいただいているが、西川図書館で作った小学校向けのリストを拝見した。中央図書館で作っている小学校向けのリストや中学校向けのリストがあるのなら、もしくは、ティーンズ向けのコーナーで、年に何回か特集で出しているようなブックリストなど、小学校から中学校向けのブックリストがあったら、資料として出していただきたい。

(司 会)

最後に、ご要望いただきました小学生向けのリストにつきましては、西川図書館が支援センターと一緒に、今年度力作を作ったので、次回、用意させていただきたいと思います。

本日は、大変ありがとうございました。